



筆算、わり算、漢字

まもなく第1Qが終わります。

1Qで習得しなければならないのは、「足し算と引き算の筆算」「わり算」そして「漢字」です。

○足し算とひき算の筆算

以下のように、今後学習していくかけ算の筆算とわり算の筆算に、足し算と引き算の筆算が用いられます。

$$\begin{array}{r}
 \times \quad 248 \\
 \quad 32 \\
 \hline
 7496 \\
 744 \\
 \hline
 7936
 \end{array}$$

$$\begin{array}{r}
 57 \\
 26 \overline{) 1485} \\
 \underline{130} \\
 185 \\
 \underline{182} \\
 3
 \end{array}$$

【かけ算の筆算には足し算の筆算が、わり算の筆算には引き算の筆算が含まれています】

今後に向けて、しっかりと足し算とひき算の筆算を身に付けていきましょう。

計算間違いは完全になくすることは難しいので、手順が理解できているかどうかを見とよいです。

特に引かれる数に0が入っている引き算は、手順が難しいです。

一番間違いが多いのは、 $603 - 197$ 、 $1003 - 585$ のような、2つ先や3つ先の位から繰り下がる筆算です。

Q休みの前と後に、たしかめテストを実施します。手順の完全な習得を目指して繰り返し練習していきましょう。

〇わり算

暗算検定12級（ 学習プリントなど）を4分以内で解くことを目指しています。

わり算は、あまりのあるわり算、わり算の筆算、分数の約分から中学校の因数分解まで、頻繁に使われる重要内容です。

$18 \div 3$ という式を解く時、「さんいちがさん、さんにがろく・・・」と順番で答えを探しているようではまだまだです。

問題を瞬間に「6!」という数字が思い浮かぶように特訓することが必要です。

体感ですが、ポイントは毎日少しずつずっと続けるよりも、一週間で一気に集中反復練習をした方が効果が高いように思います。

2Qには、「あまりのあるわり算」の単元があります。

大人にとってはなんてことのない簡単な内容だと思われるかもしれません。

しかし、右のように、あまりのあるわり算の解き方の手順は、わり算、かけ算、引き算を組み合わせで解く複雑なものです。

かけ算、わり算、引き算のどれか一つでも習得が不十分だと、たちまち躓いてしまいます。

ふくろの数は、三四12で、4
あまりは、 $13 - 12 = 1$ で、1
だから $13 \div 3 = 4$ あまり1

わり算も、Q休みの前と後に、たしかめテストを実施しますので、すばやく正確に解くことができるように繰り返し練習しましょう。

すでに暗算検定12級が達成できている場合は、あまりのあるわり算（15級、16級）の練習しておくといいです。

それも達成している場合は、わり算については十分習得できているので、ドリルパークで他の単元を学習することをおすすめします。

〇漢字

これまでユニット1～3と4～6のテストを行ってきました。

Q休み前までに7～9のテストを行い、休み明けにもう一度ユニット1～9のたしかめを行ってから、ユニット10以降に進んでいく予定です。

漢字は気を付けていても忘れてしまうものなので、何度も何度も反復練習をすることが大切です。

ただ、読書をして漢字に多く触れている子、日記などで覚えた字を積極的に使っている子は覚えるのも速いですし、忘れる量も少ないです。

覚えたことを利用・活用することで記憶の定着が図られるのでしょう。

また、3年生では部首や漢字の意味を理解することが大切です。

「洋」という字を見せて、「この字はどういう意味?」「さんずいはどんな言葉に使われることが多い?」などと問いかけながら学習することで、漢字には意味があることを理解し、その後の新出漢字の習得が段々とスムーズになっていきます。

学年が上がるにつれて学習する漢字の量が増え、難易度も上がるのは、こういった漢字に関する知識を子どもが獲得することも前提としているので、3年生でたっぷり漢字や部首の意味に触れておきましょう。